

総合科学部 研究室紹介



社会文化プログラム
佐々木 宏



行動科学プログラム
浦 光博



地域文化プログラム
佐藤 正樹



生命科学プログラム
山崎 岳



自然環境科学プログラム
奥田 敏統

さとう まさき
佐藤 正樹

研究室

地域文化プログラム



○研究内容○

狭義の文学作品ではなく、日記、手紙、裁判記録、新聞記録それから各種法律など、文字で表記された様々なものを研究対象とした、中世ドイツ語圏の人々の生活史です。元々はドイツ文学が専門でしたが、総合科学部としての授業を展開するために自己改革をして、非常に広い意味での文学を手がけるようになりました。一殺しをいれたのは嬰兒殺し、子殺しの研究です。中世ヨーロッパでは、私生児とその母親は様々な場面で差別を受けていました。私生児は職人の親方にはなれなかったんです。彼らの境遇を歌った民謡や、私生児の母親が守られる事のなかった法律の制度など、古色蒼然としたドイツ語の向こうから聞こえて来る庶民の声に耳を傾けています。

私は、歴史をひもとく人間はシャーマンでなければならぬと考えています。今の社会が抱えている問題意識にふさわしい過去の証言を選び

自分の関心と結びつけられることは何でも貪欲に挑戦するって、これを忘れちゃあけないと思っな。

取って、そこに息を吹き込むんです。辞書にも残っていない古いドイツ語の単語の意味を類推し、できるだけ折り目のきちんとした日本語に翻訳して、一人でも多くの方に読んでいただき、過去の人々の肉声を持つ価値を知ってもらいたいと思っています。

○学生時代○

ベートーベンが好きで、彼の伝記やら本やらを中学生の頃にたくさん読みました。ベートーベンの伝記には必ず一度はゲーテが登場していたので、ゲーテを読もうと考えるきっかけになりました。大学に入ると、ゲーテを翻訳ではなく原文で読みたくて、ドイツ語の勉強に明け暮れました。ゲーテのために生きたいと思いい、ゲーテに近づくためにドイツ語を勤勉に勉強しましたが、学生時代の思い出になっていきます。今でもゲーテは大好きで一番大きい二四三巻の全集から小さな数巻の選集まで、ゲーテの全集は我が家に何冊あるのかわからないくらいです。

○趣味○

音楽を聴くことです。もっぱらベートーベンとモーツァルト、たまにバッハ、忘れた頃にブラームス、年に一回チャイコフスキー。だいたい

ベートーベンとモーツァルトで、飽きないですね。

○学生に一言○

自分のやっていないことをやっている人に対しては一目置きなさい。尊敬できない人もいるから、それは尊敬しなくていい。でも、教えを請うためにせめて一目置きなさい。自分の専門分野以外のことの専門家はなれませんが、そこでの知見、研究成果を取り入れることはできません。自分の専門分野に重点を置きつつ、総合性を追求してみてください。自分の関心と結びつけられることには何でも貪欲に挑戦すること、これを忘れちゃあけないと思っな。

(担当 17生 宮下 綾奈)



さ さ き ひろし
佐々木 宏

研究室

社会文化プログラム



人から「やめろ」といわれてもやめないうらみの
情熱を持って熱中してほっじ。

○研究内容○

僕の研究は、一言でいうと発展途上国（インド）と日本をフィールドにした貧困問題の調査研究です。インドでは貧困家族の子どもの教育に関心を寄せています。日本では昨年まで札幌にいたせいで、北海道の低所得家族や札幌のホームレスの人たちを対象に研究を進めてきました。ホームレスについては調査だけではなく、彼らを支援する団体を立ち上げて活動もしていたんですよ。仕事のシエアでは、日本とインド半分半分くらいでしょうか。これまで「なんでインドと札幌のホームレスなのか？」とよく聞かれましたが、自分の中では、低所得、貧困っていう状態に置かれている人たちの生活の研究であり、彼らがどうやってたら今の状態を抜け出せるかという問題意識でやっているわけで、そうかけ離れたことをやっていると思っはいいのですが。

○きっかけ○

インドに関心を持ったのは、学生の頃、アジア貧乏旅行をするのが好きだった延長線です。貧困や社会福祉については、学生のころから「なぜ人は社会福祉という形で人助けをわざわざするのか」ということについて不思議で不思議で、それを知りたくて、研究をするはめになったという感じですね。

○学生生活○

学部の間は、あまり「優秀な」学生ではありませんでした。途上国に行ったり、そのためのアルバイトに追われたりしていました。あと、封印しているのですが友人と同人誌みたいなものを作っていました。それは考えてみたら、「ごっこ遊び」だけ、勉強というか研究のまねごとですよね。自分で本を読んで自分でまとめるといったことをやっていたわけです。その代わり、そんなことをやっていたから、授業はあんまり出てなくて。必修の科目を落として、留年はしなかったんですが、再履修ばかりやっていた学生でした。

○趣味○

今、趣味として言えるのは釣りです。学生の頃に山登りをやっていたのですが、体力的に面倒くさくなり、川

の釣りに切り替えました。

まあでも、魚釣りっていうか、川の中を歩くのが好きなのかな、緑の中を…。仕事のことを考えずにすみませうから（笑）。

○学生に一言○

四年間をのびのび使ってください。勉強、バイト、趣味、恋愛等等、することはたくさんありますが、もし勉強をメインテーマにするならば、人から「やりなさい」といわれなくてもやる、場合によっては人から「やめろ」といわれてもやめないくらいの情熱をもって熱中してほしいですね。

（担当 18生 伊東 遥）



浦 光博
研究室
行動科学プログラム



自分の能力、優秀さを客観的に理解し、
自信を持って自己表現をしてほしい。

○研究内容○

僕の専門は心理学、中でも社会心理学という領域です。社会心理学は、人と社会がどんなものであるかというところを研究するためにあります。人と社会の間には、対人関係もあれば、集団や組織もあります。さらに社会は経済システムや政治制度の違いや文化的な差を含んでいます。こういう複数の要素からなる社会と人間の行動との関係を明らかにしようとするのが社会心理学です。

中でも僕が興味を持っているのは、ネットワークや対人関係です。人と社会は、個人を最小単位として考えれば、二者関係もあり、集団や組織もあり、重層的な階層性を持っています。この階層の間の相互影響過程を明らかにしたいと思っています。要するに、個人が行動をとることで集団が変わる。集団が変わることで個人が変わる。集団が変わることで社会と個人が同時に変わる。このように相互に影響しあっている。

こういつたことの全体を的確に捉えることのできる仕組みを社会心理学の知識と手法を使って構築したいというのが、僕の見果てぬ夢です。

○きっかけ○

本を読むのが好きで、高校時代にある本を読んで、心理学を勉強したいと思いました。だけど、心理学の研究者になるつもりは全くなく、文章を書いて一生を過ごせたらと思っていました。その一つの選択肢として新聞記者になる道もあると思います。ある大学の社会学部に入りました。そこで、新聞記者になるべく勉強をしたのですが、これが全然面白くなかった。失敗したなと思って、悶々としているうちに、専門課程に入り、社会心理学や集団力学という集団の研究の授業を聞いたんです。これが面白かった。この授業を受けたときに、昔から個人や集団に対して問題意識を持っていたこと、心理学を勉強したいこと、新聞記者になるのもう面白くないからやめようということの三つが一気に解決しました。そこから研究者を目指すぞと思えましたね。

○学生時代○

一、二年生の頃はパチンコとマージャンと読書、この三つですね。本

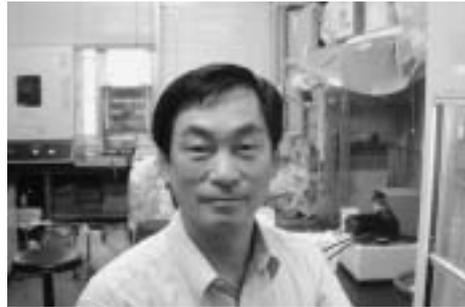
はよく読みました。特に坂口安吾の「墮落論」という本は心に残っています。僕が大学時代にもう一つ経験したのはアルバイトです。遊びもしたけど、いわゆる苦学生で、学費と自分の生活費を稼ぐのに一生懸命でした。

○学生に一言○

総合科学部の学生は常に異なる領域の人と共同のテーマについて考えることを当たり前だと思っている。だから、いまいち総合科学部の良さがかかってないだろうと思います。でもこんな環境、他にはないんです。実際に異なる領域の人達とつながるかどうかということではなく、何かのときにすぐにつながるといいうことが当たり前にある。この良さに気がついて欲しいです。

あと他の大学など広い世界と関わっていく中で、自分の能力、優秀さを客観的に理解し、自信を持って自己表現をしてほしいです。自信を持っている能力を、人に主張した瞬間、その能力には責任が伴う。能力は責任なんです。自分をしっかり見つめて、社会に向けて私はこれができるはずと言って、広大に来るだけの学力がある人間としての責任を、社会に向かって果たして欲しい。

(担当) 18生 荒川 光一



○研究内容○

今までは副腎の作るステロイドホルモンへの環境ホルモンの影響を調べていましたが、これからはステロイドホルモンの脳への作用を調べようと思っています。脳で作られるステロイドホルモンは副腎で作られるものの千分の一ほどの量しかないので研究はしづらいですが、分析技術が高感度になって検出可能になったことと脳科学の進歩もあり、脳でのステロイドホルモンの研究に移行しつつあります。環境ホルモンについての研究成果を基に、環境汚染物質の脳への影響を脳でのステロイドホルモンの変化で見る、ということを目指しています。

○きっかけ○

理学部化学科で、四年生から修士までの三年間は地球化学という分野で窒素酸化物の研究をしていました。博士課程に行く時、窒素を分解する微生物の研究をしないかと生化学

学の研究室から誘われ、生物の絡んだ地球科学をしたいとの思いもあって研究室を移りました。そこで行った微生物のチトクロムという酵素の研究の関係で広島大学に来ました。

それまでの微生物のチトクロムの研究から哺乳類のステロイドホルモンをつくるチトクロムの研究をするようになったことが大きな変化でした。主にウシなどの内臓から酵素を取り出して調べる生化学の研究をしていましたが、環境ホルモン騒ぎが起きた時に、もともと環境化学をしていたので環境ホルモンのステロイドホルモン合成に与える影響についての研究を始めました。やがて、環境汚染物質が脳にも作用するとわかり、脳でのステロイドホルモン合成について他の研究室と共同研究をしていたこともあり、今の研究が始まりました。

○学生時代○

天文部の創始者として楽しく学生時代を送りました。大学に入った時から研究者になりたかったので真面目に勉強もしました。半分勉強をして半分クラブをしたという感じですが、学生としてやりたいことは思う存分やったので、学生時代に戻りたいとは思いません。

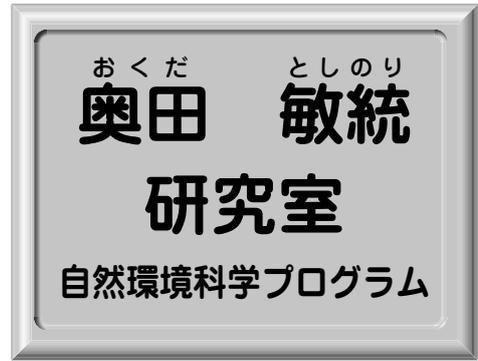
○学生に一言○

総合科学部は、学生は自主的に自分を高めるものだという前提に基づいた、性善説で成り立っている恐ろしいところです。他の学部のように必修に縛られていて勉強をしないと卒業できないシステムと違い、勉強や単位に関しての縛りが少ないので、ぼつっとしていると自分を磨かないまま卒業できてしまいます。アクトイブな人にはいいシステムであり、分野を超えて何でも学べるという長所がありますが、無理にやらせない学部なため、自分でやらないと自分を高めることはできません。それは総科の欠点のひとつだと思います。流されて楽な道を選ぶことは、能力を高めるチャンスを失っていることだと学生諸君に強く意識してほしいです。

また、総科には様々な人が集まるため目標やそれに到達する苦しみも様々です。友人の勉強時間が自分より少ないと楽をしたいと考えてしまってもいいですが、その辺りは区別して良い交友関係を保ちながら自分を高めたいです。

(担当) 18年 小野 未千恵

楽な道を選ぶことは、能力を高めるチャンスです。失うことだと意識してください。



○研究内容○

熱帯林について研究しています。特に生物多様性に関して、熱帯林の保護・保全が主な研究テーマです。

熱帯林は地球上の僅か6%の陸地面積を占めているに過ぎませんが、そこには地球上の全生物種の約50%が生息しているといわれています。どうしてこんなにも多種多様な生物が同じ場所に一緒に暮らしているのか今も謎が多いのですが、私たちの研究では、こうした生物多様性の維持機構に焦点を当てて研究を行っています。また森林伐採や土地利用転換などの人為的影響が生物多様性に及ぼす影響についても研究しています。

このように熱帯林は生物多様性の宝庫なのですが、一方で現地の人にとってみれば森林は生活の場や糧であり、地域経済の基盤となる重要な資源です。一方的な保全の押し付けでは、結果的に現地の人達や社会が

迷惑するだけです。そこでどうすればよいか―熱帯林から生み出されるいろんな公益機能をどうやって最適・最大化し、公平にみんなが享受できるようにするか―こうした問題について研究を行っています。これまでの研究はおもにマレーシア、タイ、スリランカなどの東南アジアの熱帯林で行っています。

○きっかけ○

一九九〇年に環境省の地球環境研究総合推進プログラムがスタートし、私がいた国立環境研究所に委託されました。それに前後して研究所の名前や組織が変えられ、いわゆる地球環境問題（温暖化対策・オゾン層破壊・酸性雨・熱帯林・生物多様性など）を専門的に取り扱う地球環境研究グループというプロジェクトチームが編成されました。

私はこのプロジェクトの中に出来た「森林減少・砂漠化研究チーム」に所属し、マレーシアで熱帯林の生物多様性について研究を始めることになりました。同じ研究室の誰ひとりとしてこれまで熱帯研究の経験を持っていない人が多かったのですが「これじゃあマレーシアに行くかあ」という話になって取りあえず始めてみました。それが今年で16年目です。海外の見知らぬ土地で仕事をすると

いうことは、ありとあらゆる困難がつきまといますが、やってみると氣候風土なども自分に合ってたんだん馴染んできました。94年から家族と一緒に2年間クアラルンプールに住んでいましたが、非常に楽しい思い出となり多くの友人が出来ました。

○学生に一言○

一言で言うと感性を磨いてほしい。本やインターネットで活字や映像のイメージ情報を得るだけでなく、直接、体に覚えさせてください。対象が生き物であれば、自分の目でみて、匂いを嗅いだり、かじってみるなど、五感に焼きつける努力をして欲しい。そういう感覚は若いときにこそ、効率的に会得できます。また、そうして養った感性は歳をとってからもしっかりと身に付いていますし、将来、物事の判別や意志決定を行う際に「直感」として非常に重要な役割を果たしてくれます。時間を大切に、日々の勉強や研究のなかで、しっかりとした感性を養ってほしいのです。

（担当）18生 濱本 明恵

時間を大切に、日々の勉強や研究の中で、感性を養ってほしいです。

総合科学部で専門性を追求する意義とは？

飛翔第70号を記念して、先生方に「総合科学部で専門性を追求する意義」についてお聞きしました。



佐々木宏先生

実は、まだよく分かりません。ただ、いろんな先生がずらーっと並んで、多様なメニューとして提供しているっていうのは、学生さんの選択肢が豊富であること、また視野を広げるといっていい点において大きな意味はあると思います。そのなかに僕の専門に関わる科目が、美味しいかどうかは別として……（笑）、メニューの一つとして存在する意義はあるだろうというふうに思います。

学生さんの選択肢が豊富であること、また視野を広げるといっていい点において、大きな意味はあると思います。

学際性が先に身に付き、その後で自分の専門性を深めると、非常に応用範囲の広い人間になります。



山崎 岳先生

現在の学問は事実上どこでも学際的であり、最先端の分野の多くは他の分野との複合領域です。そのため、専門性と学際性は学部や研究内容に関わらず両方得る必要があります。他の学部の人たちはまず専門性を深めますが、いつかは分野を広げて学際的にならざるを得ない場合が多いです。

総科の場合、ここに在籍するだけで色々な友人と様々な分野の講義を

受けることができ、学際性は自然と身につきます。三年生まで同じ教育を受けた友人が卒業研究では自分と全く違う分野で学問をすることが当たり前な学部のため、自分の専門でない学問に対する心理的な垣根が低く、専門性を深めた後でも裾野を広げることが容易です。これは他の学部の学生に比べると物凄い強みです。学際性が先に身に付き、その後で自分の専門性を深めると、非常に応用範囲の広い人間になります。ただ、その強みを発揮するためにはある分野でプロになる必要があります。専門性を深めて初めて、総科の長所である学際性のあるところを活かすことができます。

総科は広く学べる学部なため、「広く浅く」になるのではと言われることもありますが、そんなことは決してありません。しかし、自ら積極的に行動しないと「広く浅く」かつ「四年間で何も得たものなし」となってしまう可能性は大いにあります。

総合科学部で専門性を追求する意義とは？

総合科学部にいることで、他の領域の人とつながることに全く抵抗がない。これはいいことだと思います。

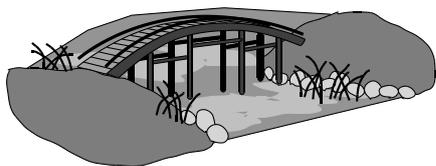


浦 光博先生

異なる領域の先生方との共同研究がとてまやりやすいですね。総合科学部でなければできないということではないですが、ただ、常に他の領域の人とつながろうと意識しています。

例えば、あるテーマが僕のところにポイントやってきたときに、すぐにこういう研究はどういう人と一緒にやったらおもしろいんだろうってそこにはばって発想が広がる。総合科学部

の中にいたら、総合科学部の人と手を組めばいいし、いなければ他の学部に行けばいい。そういうことに対して、全く抵抗がないんですね。他の領域と一緒に学ぶと、厄介じゃないか、とは全く感じません。あるテーマにとって必要であれば、誰とでもつながる。総合科学部にいることで、常にそういう方向にもの考える癖がついているので、誰とでもつながることに全く抵抗がない。これはいいことだと思います。自分の専門の幅も広がるし、とても面白いです。



奥田敏統先生

一つ目ですが、学問を究めることは専門性を追求するということですが、一方でそれは幅広い知識や技術に立脚してこそ価値が増すのだと思います。総合科学部は教養部を母体として生まれました。また、総合科学研究科の博士は、Ph. D. (Doctor of Philosophy) だと思いがちですが、そもそもPhilosophyの語源はPhilo (愛する) + sophia (知) の、飽くなき知的探求心の成果に対する称号が元々のことだと私は理解しています。アメリカの多くの大学の大学院では非常に幅広い知識が要求され、その試験にパスして初めて自分の博士論文の執筆や研究を始めることが出来るシステムになっていると聞いています。こうしたことを考えると総合

科学部で専門性を究めるということには国内では非常にユニークかつ、新たな試みだと思っています。

一つ目ですが、単に「総合科学」を二つの分野を足して割るような研究領域として捉えるのではなく、自分が勉強している内容や研究テーマが今の現実の社会の中で起こっている様々な問題の中でどういう位置にあるのか、またどういった関連性があるのかということに絶えず見据えながら展開すること—これが出来る環境にあるということが総合科学部で専門性を究めるメリットです。意義だと私は思います。

総合科学部で専門性を究めるということには国内では非常にユニークかつ、新たな試みだと思っています。

総合科学部で専門性を追求する意義とは？



佐藤正樹先生

総合科学部の特徴は、自分の本領とする研究分野を中心として、異分野に挑戦していくという考え方の姿勢にあります。

たとえば私の場合、中心にあるのは文学研究です。ある民謡に、子供を殺す話が書かれていたとします。このようなひどい話があった、この民謡はこういうことを言っているんだ、という内容でも論文を書くことはできるでしょう。しかしそれで終

大切なのは、重点を持つこと、それを極めることです。これは他の学部でも全く同じです。ただ違うところは、クモの巣のようにアンテナを張り巡らせ、そこにどまるところなく違う研究分野に獲物を探すように出かけていくことです。

わることなく、法律の歴史を勉強し、犯罪心理学を勉強し、裁判記録を読み、子供が遺体で発見されたときそれが死産ではなかったということを確認するために法医学の勉強をする。このように、単に一つの作品の文学研究をするのではなく、様々な分野の研究成果を借りて戻ってくることで、全く違う形の研究が生まれます。これは単にその研究の可能性を広げていくだけではなく、皆さん自身の人生経験も変えていくだろうと考えています。つまり、その研究だけで世界が成り立っているわけではないという当たり前のことがわかるのです。

それから、一つの専門分野を追求するだけでも立派な研究はできるけれど、そこにどまっていたのでは

処理しきれない問題があることに気が付きます。そこで自分の専門ではない分野へ出かけていって、その仕事を借りてくるのです。違う分野の専門家にはなれませんが、そこでの知見、研究成果というものを取り入れることはできます。専門分野を持ちつつ、そこから思い切って一歩踏み出して総合性を追求する人材を、私は重点的ジエネラリストと呼んでいます。シエネラリストって何でも屋だから、広く浅くなってしまうじゃないか、という若い学生さんいますが、浅くなる必要なんてありません。重点を持って、深く追求すれば良いのです。しかしそこにどまらないうで、自分の関心を積極的に広げていくということに挑戦してください。四年間で時間が足りなければそこまでしよう。けれども、それだけでは足りないということを知っているかいないかということは、社会に出てから決定的な差になります。

大切なのは、重点を持つこと、それを極めることです。これは他の学部でも全く同じです。ただ違うところ

ろは、クモの巣のようにアンテナを張り巡らせ、そこにどまるところなく違う研究分野に獲物を探すように出かけていくことです。積極的に、そして謙虚に、異分野の専門家の教えを請い、自分の本領とする分野を広げていくことのできる重点的ジエネラリスト。学生諸君にそのような人材になってもううためにも、総合科学部は必要なのです。

担当	17生	宮下 綾奈
	18生	荒川 洸一
		伊東 遥
		小野 未千恵
		濱本 明恵